

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

共通教育センター会議	
(責任者名) 木村真彦	(役職名) 共通教育センター長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムの必修科目「データサイエンス入門」と「情報処理学Ⅰ」(保健医療学部)、「情報処理学Ⅱ」(保健医療学部以外)は、全学共通の基礎分野の卒業必修科目であるため、全ての学生が履修している。また、修得状況については共通教育センターが把握できる体制にある。
学修成果	本プログラムの必修科目「データサイエンス入門」と「情報処理学Ⅰ」(保健医療学部)、「情報処理学Ⅱ」(保健医療学部以外)の成績は、共通教育センター会議で確認し、学修成果を判断する体制を取っている。令和4年度は「データサイエンス入門」「情報処理学Ⅰ」には大きな問題がないが、「情報処理学Ⅱ」は秀と優の合計が約50%いる一方で、不合格者が約16%存在した。データの操作については十分に学修できたと考えられる層も多いが、不十分な学修状況にある学生も多いのが現状である。データ操作の修得に困難を抱えている学生をフォローするために、令和5年度には授業時間外に学修サポーターによる相談会を開催する予定である。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	「データサイエンス入門」の受講者にアンケートを実施し、当該授業やプログラム全体の理解度を確認した。「受講を通じてデータやAIの社会での役割について理解が深まったか」の質問に対し、「わかるようになった」と回答した学生が75.2%で、「どちらとも言えない」が16.1%、「わからなかった」が8.7%であった。また「この科目の受講を通じて、自分自身が将来データやAIを活用していけるようになったと思うか」の質問に対し、「そう思う」と回答した学生が57.1%で、「どちらとも言えない」が32.0%、「そう思わない」が10.9%であった。今後、内容の理解度の向上と利活用力を身に付けさせる工夫が必要である。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「データサイエンス入門」の受講生に対するアンケートにおいて、後輩学生等への推奨について確認している。「面白いし、ためになるから熱心に受講しよう」を10、「卒業必修だから受講しないといけない」を1として10段階で評定してもらった。その結果、平均は5.17であった。内訳をみると、1～3が23.3%、4～7が61.5%、8～10が15.2%であった。全体的に5点前後の範囲に集中しており、高評価よりも低評価がやや多い傾向にあった。こうしたアンケートの結果を基幹科目である「データサイエンス入門」の担当教員と共有し、学生から見た魅力の向上を図っていく。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムの必修科目「データサイエンス入門」と「情報処理学Ⅰ」(保健医療学部)、「情報処理学Ⅱ」(保健医療学部以外)は、全学共通の基礎分野の卒業必修科目であるため、全ての学生が履修している。共通教育センター会議のデータサイエンス部門では、全学および各学部学科における数理・データサイエンス・AI教育の内容について各専門分野からの観点も取り入れ見直し等を行っている。なお、令和5年度より新入生オリエンテーション時に本プログラムの目的と意義を説明する予定である。また、令和5年度のシラバスにデータサイエンス教育プログラムの対象科目であることを明記するなどして、学生の履修を推進する。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは令和4年度に開始しているため、現時点で本プログラムを修了した卒業生はいないが、卒業1年半後を目途に、卒業生とその就職先を対象に毎年「卒業生・事業所アンケート」を実施しており、卒業生の進路先や活躍状況、企業等の評価を把握する仕組みを設けている。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	就職先も対象にした「卒業生・事業所アンケート」にて、本プログラムの内容・手法等について意見を聴取した。それらの産業界の視点も踏まえて、共通教育センター会議データサイエンス部門にてカリキュラムの見直し・改善等行う。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	「データサイエンス入門」の初回に、それぞれの学科で目指す資格を活かした職業に就いた際に、データサイエンスやAIがどのような役割を果たしているか、各学部(学科)の教員から紹介してもらい、「学ぶことの意義」について理解を深めている。また、授業中のワークや毎回の課題で、「自らの将来」との関連を考えさせるようにしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	授業で紹介するデータやAIの活用事例は、なるべく学生の身近な内容を取り上げ、また授業中のワークにも学生に身近なテーマを採用することで、学生がとらえやすい授業内容にしている。